

「あんちゃんからおーちゃんにつながったバトン」

むかしむかし、あるところにとっても貧しい一家が暮らしていました。

その一家の中にとっても働き者の子どもがいました。

名前をあんちゃんと言います。

あんちゃんは家が貧しくて学校に行けず十三歳ですでに仕事をしていました。

ですので、ほとんど学校には通うことができなかった勤労少年として育ちました。

あんちゃんの唯一の楽しみは読書でした。貧しすぎて本を買うことができなかった

勤労少年たちに土曜日の夜、無料で四百冊の本を所蔵している本棚から読みたい本を貸してくれる親切な本好きの大人の人が近所に住んでいました。

学校で勉強することができなかった、あんちゃんにとって四百冊の本を所蔵している本棚から本を土曜日の晩に借りることがとても楽しみで、勤労少年の中で一番本を熱心に読み続けました。

あんちゃんが読書から学びとった内容が「プラスアルファの奇跡」です。

「プラスアルファの奇跡」とは、相手や周りの人たちが期待するもの以上のことを自分で考え取り組んでいけば、奇跡のような出来事が生まれてくる、というものです。

仕事は言われた仕事だけやるのではなく、先輩や上司の仕事の仕方を教わらなくとも徹底的に盗み見て覚えることを継続していきま

「プラスアルファの奇跡」を読書から学びとり、そのことが彼の一生を方向付ける大事な核となりました。

いろんな仕事をする中で、あんちゃんは鉄道会社で仕事をするようになりました。

むかしむかしなので、当時、電話はなく電信技術を習得することも盗み見ながら覚えていきました。モールス信号を耳で聴き分ける特技を身につけてしまう程でした。

モールス信号を使って責任者の人が鉄道事故の回避する仕方を指示する様子を、何度必死に覚えしました。

ある時、責任者が夜間不在の時、緊急対応の連絡が電信で入りました。

責任者の家に行き呼びに行っていたら大事故を回避することができないと判断したあんちゃんは無許可でその処理にあたりました。

その咄嗟の判断で大事故は免れました。

しかし責任者に無許可でそういう采配をとってしまったことを見ていた同僚たちはきつとあんちゃんが厳しく罰せられると思っていました。

しかしながら、翌日、責任者がその咄嗟のあんちゃんの対応を知ると大変驚くとともに会社に大損害をもたらす大事故を回避してくれたあんちゃんに対してとても感謝しました。

あんちゃんはまだ二十歳そこそこでした

が、責任者代行の仕事を与えられ出世していききました。

当時は蒸気機関車が世界中に広がっている時代でした。

これからの時代は鉄鋼の時代だとあんちゃんを読み、鉄鋼会社を経営するようになります。

信頼できる右腕、左腕の優秀な人材と良好な人間関係を築きながら、「プラスアルファの奇跡」をひたすら続けました。

「プラスアルファの奇跡」を黙々と繰り返し努力することによって、気が付くと世界で二番目の大金持ちの経営者となりました。

ただあんちゃんは、「ただのお金の亡者にはなりたくない、死ぬ前に莫大な財産を遺して死ぬことは人間として最も恥ざべきことだ」と考えたのです。

あんちゃんは五十二歳の頃に結婚して、娘さんが一人いました。しかし家族や子孫のために莫大な財産を遺すことすら恥だと考えました。

そこで子どもの頃に無償で本を貸してくれた恩人がしてくれたように、世界中に図書館や大学、教育施設をつくりました。

貧しくて自分のように学校にいけない勤労少年たちのために無償で本を借りることができると図書館を世界中につくりました。

また、あんちゃんはあることを思いつきました。

それは、世界中の成功者五百人に二十年間かけて成功の秘訣についてインタビューをし、そこで得た秘訣を一冊の本にして出版することで「成功の秘訣を世界中の人た

ちに届きたい」という思いつきです。

そしてその一大事業を無償で取り組む若者を探し始めました。

多くの若者は二十年間、五百人もの成功者に無償でインタビューを続けるなんて割に合わないと思っただけで断る若者ばかりでした。

しかし、なっちゃんという若い新聞記者がその一大事業を僅か二十九秒で引き受けました。

あんちゃんとしては、こういう大事な決断は短い時間（一分間以内）で決断できる人でないとやり遂げることができないと考えていたので、ストップウォッチで計っていたら二十九秒でなっちゃんが決断したので、なっちゃんのことをとても気に入りました。

世界の成功者をなっちゃんに紹介してあげる仲介役をつとめました。

なっちゃんは九歳の頃、最愛の母親を亡くし、その後、ピストルを撃ちまくるような荒んだ非行少年に変わり果ててしまいました。

しかし、お父さんの再婚相手の継母さんが、なっちゃんのおき理解者となってくれてなっちゃんは立ち直っていききました。

継母さんはなっちゃんが文書を書くことが得意なのを見て、将来、新聞記者になったらよいとすすめてくれて、なっちゃんは若くして新聞記者となり、最初の仕事が世界の大富豪、あんちゃんへのインタビューだったのです。

そして二十年後、すでにあんちゃんは亡くなった後に、なっちゃんはどうとうその

一大事業をやり遂げ一冊の本を書きあげました。

その本は間もなく世界中でベストセラーになりました。

その本を夢中になって読み込んだ一人の青年がいました。

名前をくーちゃんと言います。

くーちゃんの父親はばくち打ちで飲んだくれで家族を貧困のどん底に追い込んで、くーちゃんが三歳の時に亡くなったという厳しい生い立ちで育ちました。

そんな苦労人として育ったくーちゃんはなっちゃんが書いた本を夢中になって読みふけていました。

そしてくーちゃんのお母さんが始めた保険会社を引き継ぎ経営者となったくーちゃんは、保険会社を「プラスアルファの奇跡」を使って大成功をおさめ立派な会社に発展させることに成功しました。

くーちゃんはなっちゃんの本と出会えた感謝を込めて、一冊の本をなっちゃんと共著で書き上げました。

なっちゃんとかーちゃんと全然面識のないおーちゃんという青年が同じ国に住んでいました。

おーちゃんは若い頃から最愛のお母さんの期待を一身に受け、将来、作家になることを夢見ていました。

お母さんが読書好きでおーちゃんも大の読書好きでした。

作家になるために大学進学を夢見ていましたが、そんなときに突然、最愛のお母さんが亡くなってしまいました。

深い悲しみにくれる中で大学進学をあきら

め、しばらくは製紙工場で働き、その後、軍隊に入隊し戦争を体験し、除隊してから会社員となり、結婚して子どももできました。

会社員として働きながら、最愛のお母さんの夢でもあった作家になる努力をしましたが、出版社から自分が書いた本を出版するという夢はかないませんでした。

そういう挫折体験を重ねることで、作家になる夢を諦めてしまい、惰性で働いていたので会社を首になってしまい、挙句の果てに借金を抱えてしまう始末でした。

その後、アルコールに溺れるようになっておーちゃんの生活は荒んでゆく一方で愛想をつかした奥さんは娘さんを連れて家を出て行ってしまいました。

最愛のお母さんを突然亡くし、仕事を首になり、家族にも見捨てられ、アルコール依存症の浮浪者になりはててしまいました。気が付くと質屋の前で、おーちゃんは一

人ぼっちで立ちすくんでいました。質屋のウインドウの中には、二十九ドルのピストルが売られていました。

おーちゃんのズボンのポケットの中にはしわくちゃの十ドル札が三枚ありました。おーちゃんはそのしわくちゃな十ドル札三枚を握りしめながら、このみじめな人生を目の前に売られているピストルで、頭をぶち抜いて終わりにしようという衝動がみるみるうちにこみ上げてきました。

しかしその後、気づいてみるとおーちゃんは何故か図書館の中で一冊の本を夢中になって読んでいました。

その本が、なっちゃんとかーちゃんの共

著の本でした。

その本に目を覚まされ、くーちゃんが経営する保険会社の面接試験を受けました。

一冊の本に魅せられて会社を受けたことを熱く語っていたおーちゃんをくーちゃんは採用しました。

そして一生懸命働くおーちゃんを見込んで社報の編集者を任せました。

もともと作家になりたかったおーちゃんですからその仕事を誠心誠意尽くしてがんばりました。

そして気が付いてみると人々に勇気と感動を与える本を書き上げていました。

なかなか出版してくれる会社が見つかりませんでした、とうとう出版してくれる会社が見つかりました。

そして出版された本は瞬く間にベストセラーとなりました。

本が短期間に売れているということを知ったおーちゃんは、気が付くと泣きながら教会で天国の最愛のお母さんに報告していました。

その後、おーちゃんは再婚し、幸せな家庭を築き、世界中の人々に勇気と感動を与える作家として著作活動と講演活動に大忙しとなる自己啓発作家に成長しました。

この物語の題名のバトンとは読書のバトンです。

貧しすぎて学校に通うことができなかつたあんちゃんが、無償で本を貸してくれる恩人から受けた恩を、世界中の貧しい少年たちに返したいと思いました。

あんちゃんとは、アメリカのカーネギーホールを建てたことで知られている鉄鋼王安ドリュー・カーネギーさんです。

読書の恩人のおかげで「プラスアルファの奇跡」を実践して世界的成功者になり、アメリカ人でありながらアメリカの帝国主義に反対しフィリピン独立運動や平和活動（カーネギー国際平和基金の設立等）を行ったことで現在の国際連盟のもとを築いたと言われている人がアンドリュー・カーネギーさんです。

読書の恩人のおかげで大成功して築いた莫大な財産を私欲のために使わず、世のため人のために使うことが大事なことで考え、世界中で慈善活動に取り組みました。

ただ貧しい人にお金を与えるような生活保護的な慈善活動ではなく、かつての自分自身のように学びたい人に学ぶ機会を与えることができるような無料で利用できる図書館の建設に力を入れました。

『富の福音』という本に慈善活動に対する思いを込めて出版しました。千八百八十九年に出版された『富の福音』は未だに世界中で読み継がれた名著となっています。

カーネギーさんからの依頼を僅か二十九秒で引き受けたなっちゃんとは、現在も世界中で読み続けられている自己啓発書『思考は現実化する』という大ベストセラーを書いたナポレオン・ヒルさんです。

そしてそのナポレオン・ヒルさんの『思考は現実化する』という本によって経営者として大成功したくーちゃんがクレメント・ストーンさんです。

なっちゃんとかーちゃんの共著の本が、
おーちゃんの命を救ったと言ってもおかし
くない『心構えが奇跡を生む』という自己
啓発本です。

そしておーちゃんとは『地上最強の商人』
『十二番目の天使』という世界に自己啓発
小説というジャンルを確立したオグ・マン
ディーノさんです。

読書のバトンが無名の恩人からアンドリ
ユー・カーネギーさんへ、そしてアンドリ
ユー・カーネギーさんからナポレオン・ヒ
ルさんへ、ナポレオン・ヒルさんからクレ
メント・ストーンさんへ、クレメント・スト
ーンさんから自殺願望を持ったアルコール
依存症の浮浪者同然だったオグ・マンディ
ーノさんに渡されていきました。

アルコール依存症で浮浪者になるまで荒
んでしまった人を、世界的ベストセラー作
家に変える力が読書にはあります。

名もない恩人の善意が、一人ひとりの人
生を変える力が読書にはあります。

偉人のほとんどが読書の習慣を持ってい
たことを考えると、読書こそが「プラスア
ルフアの奇跡」なのかも知れません。